国際サンゴ礁研究・モニタリングセンター
ニュースレター
開所十周年記念号

Lagoon

ラグーン

2011. 3
No.15

国際サンゴ礁研究・モニタリングセンター
ニュースレター　第15号
Lagoon 十周年記念号

はじめに

【「Lagoon」国際サンゴ礁研究・モニタリングセンター開所十周年記念号の発刊について】

2000年（平成12年）に国際サンゴ礁研究・モニタリングセンター（以下サンゴセンター）は開所し、2010年（平成22年）12月12日に開所十周年記念式典を開催し、関係者の皆様に御礼を申し上げることができました。

今回サンゴセンターのニュースレターとして毎年発行している「Lagoon」を十周年記念号として発行することにいたしました。

今号では開所して以来、お世話になっている関係者の皆様から十周年のお祝いの言葉を頂いたので紹介するとともに、開所十周年記念事業の様子をご報告したいと思います。

またサンゴセンターに勤務した歴代の職員から当時の思い出や苦労話、今後の国際サンゴ礁研究・モニタリングセンターに対する期待やメッセージ等の寄稿を頂きました。

さらにサンゴセンターの十年を振り返り、現在のサンゴセンターの様子を紹介します。

ここに、お忙しいにも関らず寄稿依頼に快く応じて頂いた皆様に心から御礼申し上げます。

サンゴセンターも開所してあっという間に十年が経ちました。次の十年がサンゴ礁の保全にとって素晴らしい十年になりますように。。。

表紙の写真
場　所：石西礁湖（2010年６月22日撮影）
撮影者：勝部五葉（石垣自然保護官事務所）

目　次

ページ

国際サンゴ礁研究・モニタリングセンター開所十周年によせて

ごあいさつ
環境省自然環境局長　渡邉　綱男　4

開所十周年を祝して
石垣市長　中山　義隆　5

開所十周年を祝して
竹富町長　川満　栄長　6

開所十周年を祝して
沖縄県文化環境部長　下地　寛　7

サンゴ礁の未来と国際サンゴ礁研究・モニタリングセンター
琉球大学理学部教授　土屋　誠　8

国際サンゴ礁研究・モニタリングセンター開所十周年
～振り返りと抱負～
環境省那覇自然環境事務所長　奥田　直久　9

国際サンゴ礁研究・モニタリングセンター開所十周年記念事業のご報告

記念式典の報告　10

10年のあゆみスライド　12

観察会の報告　14

展示会の報告　16

ジオラマ作成（八島小学校５年生）　19

ページ

歴代石垣自然保護官事務所からのメッセージ

「モミタリングセンター」から10年
環境省自然環境局自然環境計画課　生物多様性地球戦略企画室　室長補佐　川越　久史　20
（石垣自然保護官事務所在職期間　平成11～12年度）

国際サンゴ礁研究・モニタリングセンター開所十周年によせて
環境省京都御苑管理事務所　普及指導企画官　高橋　博幸　21
（石垣自然保護官事務所在職期間　平成11～13年度）

すぐそばにある自然
環境省自然環境局総務課　動物愛護管理室　指導企画係長　鈴木　祥之　22
（石垣自然保護官事務所在職期間　平成14～15年度）

いつまでもサンゴ礁が身近なものであるように
鹿児島大学教育センター　特任准教授　岡野　隆宏　23
（石垣自然保護官事務所在職期間　平成15～17年度）

島人とともに
環境省中部地方環境事務所　国立公園・保全整備課　課長　野村　　環　24
（石垣自然保護官事務所在職期間　平成17～18年度）

初めてのレンジャー経験となった八重山
環境省東北地方環境事務所　大船渡自然保護官事務所　自然保護官　久保井　喬　25
（石垣自然保護官事務所在職期間　平成18～19年度）

シマヌサチニガティ（島の幸せを願って）
環境省自然環境局自然環境計画課　生物多様性地球戦略企画室　持続的利用係長　廣澤　　一　26
（石垣自然保護官事務所在職期間　平成19～20年度）

国際サンゴ礁研究・モニタリングセンター10年のあゆみ（年表）　27

写真でふりかえる国際サンゴ礁研究・モニタリングセンター10年　28

石垣自然保護官事務所職員紹介　30
自然保護官　田村　努
自然保護官　渡瀬　博美
自然保護官　佐藤　大樹
自然保護官補佐　勝部　五葉
自然保護官補佐　比屋根　理恵
事務補佐員　山下　三智子

十周年記念事業を終えて　～職員からのメッセージ～　31

編集後記　32

国際サンゴ礁研究・モニタリングセンターのご利用について　32

国際サンゴ礁研究・モニタリングセンター開所十周年によせて

ごあいさつ

環境省自然環境局長　渡　邉　綱　男

「国際サンゴ礁研究・モニタリングセンター」は、2000年（平成12年）５月に、我が国はもとより東アジア海におけるサンゴ礁の保全・研究の拠点として設立され、これまで、国内外のサンゴ礁に関する情報の収集・整理・提供や、海外支援活動、普及啓発活動など多岐にわたる活動に取り組んでまいりました。

本センターの活動が十周年を迎えることができたのも、八重山の地域の方々の御理解と御協力に負うものであり、2010年12月の本センター開所十周年記念式典に御臨席頂き、一緒に祝って頂いた皆様、そして日々の活動を御支援頂いている皆様に、心より感謝申し上げます。

八重山においても、西表石垣国立公園のパークボランティアの皆様、石垣島周辺海域環境保全対策協議会や八重山サンゴ礁保全協議会、さらには石西礁湖自然再生協議会に御参画いただいている皆様等、多くの方々が、サンゴ礁保全に関わる地元の活動を盛り上げていらっしゃることに、大変勇気づけられ、心強く思います。

この10年間、サンゴをめぐる様々な動きがありました。2001年と2007年には沖縄でも大規模な白化現象が確認されましたが、世界各地で海水温の上昇とサンゴの白化現象が顕在化しています。世界的にサンゴの再生を求める声が高まる中、2008年の国際サンゴ礁年などを契機に、多様な主体の参画による保全再生活動が活発化しています。

八重山周辺では、2002年から環境省が実施している「石西礁湖自然再生事業」や、2007年に区域を拡張し名称も変更した「西表石垣国立公園」の保全管理など、現在も、関係機関、研究者、ボランティアはじめ八重山地域の各方面の皆様に御尽力頂き、各種の取組みを推進しているところです。

国内では、2010年４月に、日本のサンゴ礁生態系の保全の基本方針と、今後５年を目処に取り組むべき具体的な行動を示すものとして「サンゴ礁生態系保全行動計画」が策定されました。

国際的には、2010年６月にタイのプーケットで開催された第６回国際サンゴ礁イニシアティブ（略称ICRI）東アジア地域会合において「東アジア地域サンゴ礁保護区ネットワーク戦略2010」が策定され、今後、東アジア地域各国との連携が期待されます。

このような時代の流れの後押しを受け、本センターの役割は、八重山のみならず、日本そしてアジアのサンゴ礁保全のために一層重要なものとなります。本センターが国内外におけるサンゴ礁保全の中心的施設として発展するとともに、その活動が八重山の皆様に様々な形で貢献できることを祈念します。

国際サンゴ礁研究・モニタリングセンター開所十周年によせて

十周年を祝して

石垣市長　中　山　義　隆

このたび、環境省国際サンゴ礁研究・モニタリングセンターが開所十周年の節目に記念誌を発刊されるにあたり、石垣市を代表してお祝いの言葉を申し上げます。

ご承知のとおり、八重山海域には、国内最大のサンゴ礁が分布し360種以上の造礁サンゴ類が生息しており、世界的にも誇れる自然豊かな海域であります。しかしながら、このように貴重なサンゴ礁も、海水温の上昇とサンゴの白化、オニヒトデの異常発生によるサンゴの食害、陸域からの赤土等の流出によるとみられるサンゴの劣化等、環境保全対策等の課題を抱えております。

その中において、国際サンゴ礁研究・モニタリングセンターは地球規模サンゴ礁モニタリングネットワークの北東アジアの地域拠点として、サンゴ礁に関する情報の収集・整理・提供や、サンゴ礁の状態を把握するモニタリング調査を実施する場として平成12年に開設して以来、石垣島周辺海域や石西礁湖を中心に、研究者レベル、市民レベルのモニタリング調査の推進・支援に大きな成果を上げておられ、また、八重山海域のサンゴ礁保全の普及啓発にご尽力いただいていることに対し深く敬意と感謝を申し上げます。

サンゴ礁の美しさは、人々の心に自然の素晴らしさと感動を与えるものですが、サンゴはそこに生息する生物群集を育み、同時に水産資源の持続的確保、炭素循環機能、更に人々の生活や環境に重要な役割を果たしています。

このようなことから本市としましても、海域への赤土等の流出防止の取り組みはもとより、サンゴ礁の保全・保護事業を導入し、関係機関とも連携のうえ各種施策の充実を図ることとしております。

国際サンゴ礁研究・モニタリングセンターにおかれましては、これからも一人でも多くの人にサンゴ礁の価値や重要性、保全の必要性を訴える活動を展開していただき、八重山海域の自然環境の保全を図る上でも貴重な拠点となりますようお願い申し上げます。

結びに、奥田事務所長はじめセンター関係者の皆様のご活躍に敬意を表し、皆様のご健勝をお祈り申し上げ、お祝いのことばといたします。

国際サンゴ礁研究・モニタリングセンター開所十周年によせて

十周年を祝して

竹富町長　川　満　栄　長

このたび、環境省国際サンゴ礁研究・モニタリングセンターが開所十周年を迎え、記念誌を発刊されることを心よりお喜び申し上げます。

今年は、国連が定めた国際生物多様性年であり、去った10月には生物多様性条約第10回締結国会議（COP10）が日本で開催されるなど、生物多様性保全と利用への関心が高まっています。その年に、国際サンゴ礁研究・モニタリングセンターが10周年を迎えることは、海の生物多様性や海域環境の保全という観点からも大変意義深いことだと感じております。平成12年の開所以来、石西礁湖はもとより北東アジアのサンゴ礁モニタリングネットワークの拠点として地域と共に歩んでこられましたことに感謝いたします。

八重山の青い海は、都会の喧騒を忘れさせ訪れる人々の心を癒してやみません。八重山を外にアピールするとき、海は広告塔であります。竹富町の海域においても生息するサンゴ礁や生き物は地域の誇りであり、宝だと考えています。これを後世に引き継ぐ事が現代に生きる私たちの使命であると考えております。

また、西表石垣国立公園内において、海域公園地区を新たに創設、拡大する構想がある中で、サンゴ礁が海中生物を育み保護していく機能は一層クローズアップされることと思います。漁業事業者においても、水産資源の持続した活用が重要であり、充実した漁場を形成するサンゴ礁の役割は多大であり重要だと考えます。

更に、八重山のサンゴ礁は世界有数の貴重な観光資源であり、その存在は観光業者と切っても切り離せない関係にあります。そのような中で、今後とも国際サンゴ礁研究・モニタリングセンターの活動は地域においても中核をなすものであり、更なるご活躍にご期待申し上げます。竹富町においても、これからもオニヒトデの食害対策をするとともに、サンゴ礁保全が効果的に行える施策を検討していく所存です。

結びに、那覇自然環境事務所所長をはじめ職員皆様のこれまでの功績に敬意を表し、今後とも国際サンゴ礁研究・モニタリングセンターにおける活動が充実し、皆様のますますのご発展を祈念申し上げ、お祝いのことばといたします。

国際サンゴ礁研究・モニタリングセンター開所十周年によせて

十周年を祝して

沖縄県文化環境部長　下　地　　寛

この度、国際サンゴ礁研究・モニタリングセンターが開所十周年を迎えられたことを心よりお喜び申し上げます。

国際サンゴ礁研究・モニタリングセンターは、平成12年に環境省が開設して以来、サンゴ礁保全に関する東アジア海域のネットワークの拠点として、また、国内におけるサンゴ礁保全の拠点として、モニタリング調査結果やサンゴ礁に関する情報を収集・整理し、国内外へ情報発信するとともに、サンゴ礁保全に関する普及啓発活動の実施など、サンゴ礁保全に多大な貢献をしてこられました。これまでのご尽力に対しまして、心より敬意を表します。

貴センターの開所から10年を迎える節目の年に当たり、「第10回生物多様性条約締約国会議」が開催され、名古屋議定書等が採択されたことは、国際的なサンゴ礁生態系の保全・再生や海洋保護施策等を展開していく上で、誠に意義深いものであります。

このように、国際的にも生物多様性保全の機運は高まっており、貴センターの果たす役割は国際的にもますます大きくなっていくものであり、また、八重山地域の自然環境の保全と活性化へも貢献していくものと期待しております。

沖縄県は、亜熱帯海洋性気候の下、美しいサンゴ礁が発達した青い海と多様な野生生物が生息・生育する緑豊かな島々から構成されており、生物多様性に富んだ、豊かな自然環境を有しています。

その中でも、サンゴ礁は、沖縄県の豊かな自然環境の基盤として、生物多様性の保全、観光・漁業資源として重要な価値を有しており、これらを劣化させることなく、次世代に引き継ぐことが求められます。

沖縄県としましては、官民協働の「沖縄県サンゴ礁保全推進協議会」を支援し、民間のサンゴ礁保全活動を促進するとともに、陸域を含めた沿岸域の総合的な管理の観点から、サンゴ礁の保全・再生等の方策を検討し、効果的なサンゴ礁の保全に取り組んでいく所存であります。

結びに、今後も国際サンゴ礁研究・モニタリングセンターの活動が実り多い成果を生み出すことを期待いたしますとともに、ますますの御発展を祈念申し上げ、お祝いの言葉といたします。

国際サンゴ礁研究・モニタリングセンター開所十周年によせて

サンゴ礁の未来と国際サンゴ礁研究・モニタリングセンター

琉球大学理学部教授　土　屋　　誠

開所十周年記念式典において、土屋先生から「サンゴ礁の未来とモニタリングセンター」というタイトルで講演を頂きました。先生は生物多様性をキーワードとしたサンゴ礁や島嶼生態系の動態に関する多面的な研究及び生態系の機能とサービスに関する研究を進めていらっしゃいます。講演でお話し頂いた内容をこのLagoonの為にまとめて頂くとともに、今後の国際サンゴ礁研究・モニタリングセンターへの期待を頂きました。

日本のサンゴ礁は、那覇市のような大都市の近傍など、人間活動が活発な地域に発達している。石西礁湖の大部分のサンゴ礁は漁場やダイビングポイントとして利用されており、多大な人間活動の影響を受けている。現在も人口が増加傾向にあるアジア地域においては、人間とサンゴ礁との共存に関して幾つかの課題を解決しなければならない。

サンゴ礁で起こっている事実を把握し、サンゴ礁の重要性を科学的に解明すると、サンゴ礁に関する研究を一層発展させ、保全に関する活動を実施する必要性が理解できる。サンゴ礁には多くの重要な価値・機能がある。１）漁場としての価値、２）生物多様性の維持の場としての価値、３)防波堤としての機能、４)環境浄化機能：環境は生物の健康的な活動によって一定に維持されている、５）教育・研究の場としての価値、６）景観機能、７）地球環境の指標としての役割、などであり（土屋・藤田、2009など)、最近では「生態系サービス」という言葉で紹介される事が多い。これらを認識することにより、美しいサンゴ礁を未来に残すために活動すべき事柄が見えてくるだろう。

生態系の機能・価値を経済的に評価する試みが行われている。漁場としての価値は漁獲高を利用して評価できる。景観機能として文化的・精神的に受ける恩恵の例としては「観光・レクリエーション」に関する費用が価値として評価される。例えば１年間に沖縄観光を楽しんだ観光客が要した費用を推算するとよい。また、島を取り巻いているサンゴ礁が防波堤の役割を果たしているので、人工的に防波堤を構築する場合に必要な経費を計算すると防波堤としての価値が推測できる（豊島・土屋、印刷中)。支払い意思額を用いた評価方法もよく使われる。サンゴ礁の保全活動に対して支払う可能性がある金額を積算して価値として考える方法である。ただし、これらを総合的に判断する場合、評価内容が重複する場合には過大評価になる可能性があるので要注意である。

多くの価値を持つサンゴ礁を保全するために国際サンゴ礁研究・モニタリングセンターに期待されることが幾つかある。研究体制を充実させ、情報収集に努めること、国内および国際的な連携を深めて多様なネットワークを構築し、保全のためのより具体的なアクションを起こすこと、などである。

赤土問題などを考えれば、サンゴ礁生態系が周辺の多くの生態系と関わりを有していることは明白である。サンゴ礁だけでなく、陸上やマングローブ域まで視野に入れた環境保全活動をすることが期待される。この議論は、最終的には地球環境の保全に関する議論に発展する。

【参考文献】

豊島淳子・土屋　誠（印刷中)「サンゴ礁はいくらか」『日本サンゴ礁学会(編)サンゴ礁学』東海大学出版会
土屋　誠・藤田陽子（2009)「サンゴ礁のちむやみ―生態系サービスは維持されるか」東海大学出版会

国際サンゴ礁研究・モニタリングセンター開所十周年によせて

振り返りと抱負

環境省那覇自然環境事務所長　奥　田　直　久

この度､「国際サンゴ礁研究・モニタリングセンター」は、開所十周年を迎えることができました。

これも偏に八重山の地域の方々の御理解と御協力、そして関係各位の御指導と御支援の賜物と厚く御礼申し上げます。

十周年の節目にあたり､当センターのこれまでを振り返りつつ､今後期待される役割についてご紹介したいと思います。

１. 国際サンゴ礁研究・モニタリングセンターが果たしてきた役割

当センターは、サンゴ礁の持続的な利用と保全のための国際的な協力の枠組みである「国際サンゴ礁イニシアチブ（**ICRI**）」の一環として、サンゴ礁の現状を把握し、保全と管理のための基礎的情報の収集をすすめるためのプログラムである「地球規模サンゴ礁モニタリングネットワーク（**GCRMN**）」を推進するための東アジアの拠点施設として2000年（平成12年）５月に石垣市に設置されました。

以来10年間、次の３つの事業を柱に様々な事業を行って参りました。

（１）サンゴ礁に関する情報の収集、整理及び提供

・収集、整理した情報は、 ホームページ（http://www.coremoc.go.jp/）やニュースレターLagoon（ラグーン）等により提供しています。

（２）サンゴ礁調査モニタリング

・黒島にあった海中公園センターで1983年（昭和58年）から継続していた広域モニタリング調査を引き継いで実施しています。（2003年（平成15年）以降は生物多様性センターのモニタリングサイト1000調査と統合）

・研究者レベル、市民レベルのモニタリング調査の推進・支援として、センターの実験室、資料室、レクチャールーム等をご利用いただいています。

・2002年（平成14年）から、石西礁湖自然再生事業における各種モニタリング調査を実施するとともに、小浜島東方に設置したモニタリングブイによる海況観測を2008年（平成20年） ７月に開始しました。観測データは常時モニタリングブイウェブサイト(http://www.e-monitoring.jp/)で公開しています。

（３）普及啓発活動

・1972年（昭和47年）の国立公園指定当時から継続している自然観察会「海の自然教室」を継続しています。小学生向けのサンゴ礁学習ワークブック「サンゴブック」等の作成、小学校と連携した「子どもパークレンジャー事業」の実施なども行っています。このほか、シンポジウム等のイベントを開催するなど、地元の方々に海やサンゴ礁に親しんでいただき、関心を持ってもらうための活動を行っています。

（４）センター活動に関連するその他の取組

・石西礁湖の衰退しつつあるサンゴ礁の回復を目指して、環境省ではサンゴの移植を含む自然再生事業を平成14年度から実施してきています。2010年（平成22年）には、移植したサンゴの産卵が初めて確認されました。

・オニヒトデ対策も、沖縄県、石垣市等とも連携しつつ、地元の漁協やダイバーの方達のご協力を得ながら実施してきています。

・このほか、センター内には石垣自然保護官事務所が置かれており、サンゴ礁だけでなく干潟や森林地域の保全、また希少野生生物の保護や外来種対策など、八重山地域の自然環境保全のための幅広い取組が行われています。

２. 国際サンゴ礁研究・モニタリングセンターのこれから

現在、世界中のサンゴ礁を取り巻く環境は、非常に厳しい状況にあります。

八重山地域においても、特に2007年（平成19年）の海水温の上昇による大規模な白化現象で石西礁湖中央部や南部で多くのサンゴが死滅してしまいました。また、大型の台風の来襲も頻繁になってきています。この他にも、オニヒトデの大量発生や人為的な環境負荷など、様々な要因によりサンゴ礁の衰退傾向が続いています。

このため、環境省では2010年（平成22年）にサンゴ礁生態系保全行動計画を策定し、サンゴ礁保全の取組の一層の促進を目指しています。現場で重要な役割を果たす当センターについても、運営体制の強化を図ることとしています。さらに､国立公園制度の中でも､西表石垣国立公園内のこれまでの海中公園地区を見直し、新たに創設された海域公園地区の指定に向けて､準備を開始しました。

私たちに様々な恵みをもたらしてくれるサンゴ礁の海を次世代に渡って保全していくためには、まず、いつ、どこで、どのようなことが起こっているのかということを知ることが不可欠であり、それが分からなければ、手の打ちようがありません。

当センターでは、この記念すべき10周年を契機に、職員一同、心を新たにして八重山の皆様をはじめ、サンゴ礁に関わる皆様の御期待にお応えするため、今後もサンゴ礁のモニタリング等を続けることにより、サンゴ礁がどのように変化してきているのか、今サンゴ礁は何によって被害を受けているのかを把握し、国際的な連携を図りつつ、東アジア地域のサンゴ礁の更なる保全活動につなげて行くとともに、地元の八重山地域の自然環境保全のために、なお一層の努力を傾注して参る所存でございます。

今後とも、より一層の御指導、御支援を賜わりますようお願い申し上げます。

国際サンゴ礁研究・モニタリングセンター開所十周年記念事業報告

開所十周年記念式典報告

開所十周年記念事業は12月12日に行われた記念式典、式典の前日に行われた観察会（美ら海自然教室）、12月12～26日まで行われた展示会（ヌングンジィマ展）の３本柱で行いました。ここでは記念式典、観察会、展示会についてご報告します。

記念式典次第

日　時：平成22年12月12日（日）　９:00（８:30開場）
場　所：センター前　駐車場
司　会：田村自然保護官
１　開　会
２　式　辞　　環境省大臣官房審議官　渡邉　綱男
３　来賓祝辞
　　石垣市長　　中山　義隆
　　竹富町長　　川満　栄長
　　沖縄県文化環境部長　　下地　　寛
４　センターのあゆみ
　　那覇自然環境事務所長　奥田　直久
５　記念講演「サンゴ礁の未来とモニタリングセンター」
　　琉球大学理学部教授　　土屋　　誠
６　閉　会

平成22年12月12日（日）に国際サンゴ礁研究・モニタリングセンター（以下センター）の開所十周年式典を中山義隆石垣市長、川満栄長竹富町長等のご来賓を迎え開催いたしました。ここに式典の様子をご報告させていただきます。

開会にあたり、環境省大臣官房渡邉審議官より、環境省を代表してご挨拶申し上げました。

地元関係者の皆さま、サンゴ礁の保全や研究に携わる皆さまからのセンター運営や活動に対するご協力に御礼申し上げるとともに、センターの開設以来、サンゴ礁保全に関する環境行政や八重山における自然環境施策の動きをご報告いたしました。具体的には平成14年からは石西礁湖自然再生事業が開始されたこと、平成19年には石垣島を西表石垣国立公園へ編入したこと、平成20年は国際サンゴ礁年であり関連したイベントが開催されサンゴ礁保全の気運が高まったこと、平成22年にはサンゴ礁保全行動計画が策定され、サンゴ礁保全の方針が定められたこと等です。

また平成22年10月にはＣＯＰ10（生物多様性条約第10回締約国会議）が開かれ、海域、海洋の様々な局面で議論がなされ、今後「海洋生物多様性保全戦略」を策定し、海洋保護区のネットワークを形成していくことをご報告いたしました。そして環境省としてはセンター開所十周年を機に八重山周辺海域を含む日本、アジア全体のサンゴ礁保全の取組を強化していく事をご報告し、挨拶といたしました。

つづいて中山義隆市長、川満栄長町長、下地寛部長よりご祝辞を賜りました。日頃からセンターと協力して、地域のサンゴ礁保全にご尽力されている皆さまです。

中山市長からは、八重山圏域最大の自治体として特に赤土等の流出の防止やサンゴ礁の保全保護事業を導入し海域保全施策の充実をはかるとともに、八重山海域の自然環境保全にセンターと協力して取組んでいく旨、ありがたいお言葉を頂きました。

環境省を代表して式辞を申し上げる渡邉大臣官房審議官（当時）。サンゴセンターが開所十年という節目を迎えることに御礼申し上げるとともに、環境省のサンゴ礁保全の方針を申し上げました。

中山石垣市長より祝辞を賜りました。

川満町長からは、竹富町のサンゴ礁やそこに住む生き物は地域の誇り、宝であり、後世に引き継ぐ事が重要であること、また竹富町の海域が広く含まれる西表石垣国立公園区域において、サンゴ礁が海中生物を育み保護していく機能の重要さとその保全にセンターと協力して進めていくというセンターへの期待を込めたお言葉を頂きました。

川満竹富町長より祝辞を賜りました。

下地部長からはセンターの設計・整備を担当いただいた沖縄県の立場から感慨深いお言葉とともに、近年では官民協働の「沖縄県サンゴ礁保全推進協議会」を設立されたことや、環境省とともに八重山、沖縄県全域のサンゴ礁保全を進めていくお言葉を頂きました。

ご祝辞に続いてはセンターを現地で管理している那覇自然環境事務所長の奥田よりセンターの活動など「10年のあゆみ」についてスライドを使用しご説明さしあげました。

続いて記念講演として琉球大学理学部土屋教授より「サンゴ礁の未来とモニタリングセンター」というタイトルで講演を頂きました。先生は琉球大学にご在籍され、長年サンゴ礁生態系について研究をされています。サンゴ礁の生態系サービス機能についてその重要性をわかりやすく紹介いただくとともに、その保全に関するセンターの機能の重要性を改めて認識するご講演でした。

土屋琉球大学理学部教授より記念講演と「サンゴ礁の未来とモニタリングセンター」と題し記念講演を頂いているところです。

土屋教授の講演をもちまして、センター開所十周年記念式典を閉会いたしました。

式典後には来賓の方々にサンゴ礁研究モニタリングセンター開所十周年記念展示会「ヌングンジィマ展」をご覧いただき、またセンターの活動フィールドの見学として竹富島東部サンゴ礁をグラスボートによってご覧いただきました。

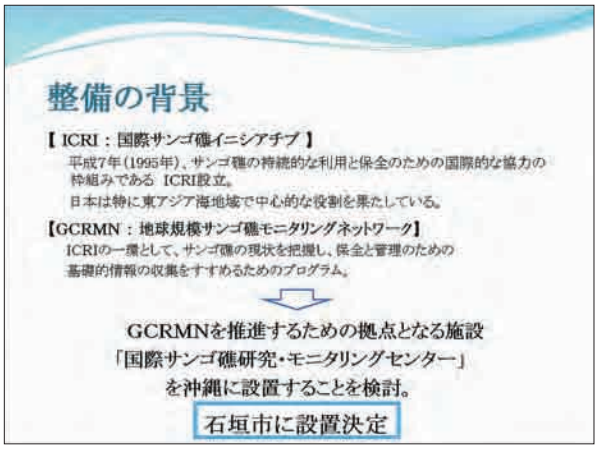
竹富島東部のサンゴ礁をグラスボートでご覧頂きました。

記念式典に出席してくださる来賓を迎えるセンター職員。来賓の皆さまは朝早くから式典に出席していただき感謝いたします。

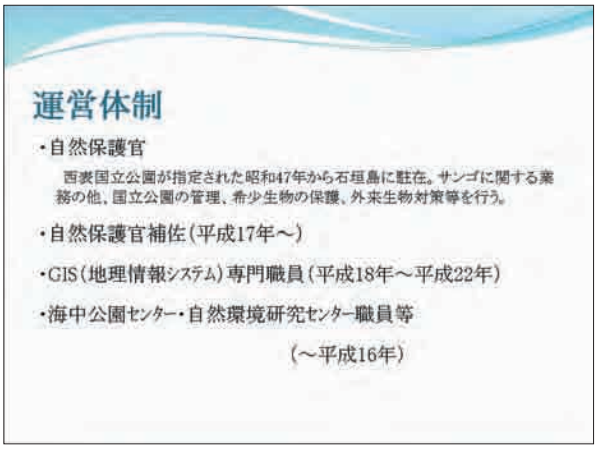
十周年記念式典開催時には、石垣自然保護官事務所の隣にある西表自然保護官事務所から応援にきてくれました。写真左から永長自然保護官、山城自然保護官補佐、浅利自然保護官補佐。

国際サンゴ礁研究・モニタリングセンター開所十周年記念事業報告
10年のあゆみ

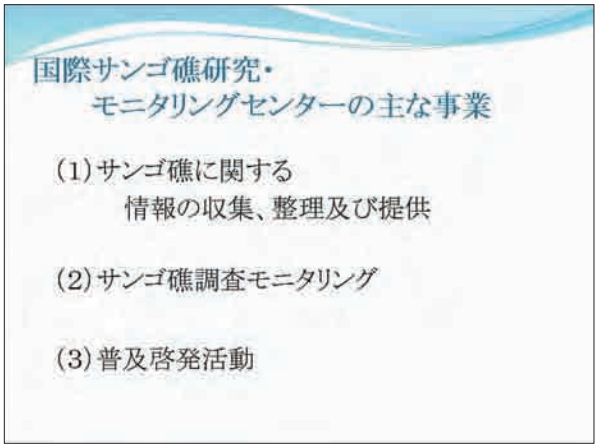
記念式典の際に使用した10年のあゆみを一部省略、
改変してこれまでの経緯を紹介します。



1：環境省(当時は環境庁)ではGCRMN推進の東アジア地域の拠点施設を設置することを決め、良好なフィールドの存在と西表国立公園管理事務所がある石垣市に国際サンゴ礁研究・モニタリングセンターを設置することを決定しました。

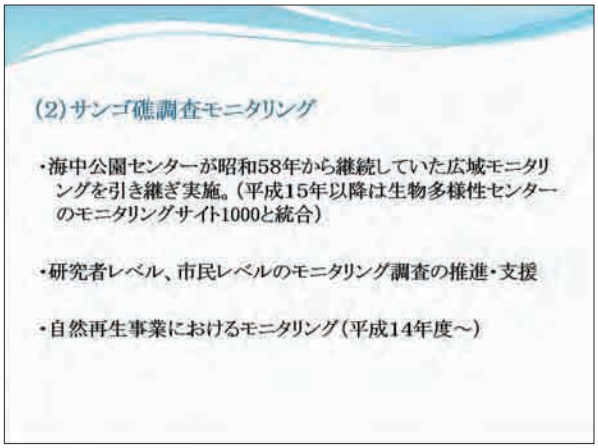


2：平成12年５月12日、本センターが開所しました。国立公園指定当時から駐在していた国立公園管理官と海中公園センター職員の体制でスタート。その後、自然保護官補佐や地理情報システムの専門職員等が加わりながら運営を行っています。



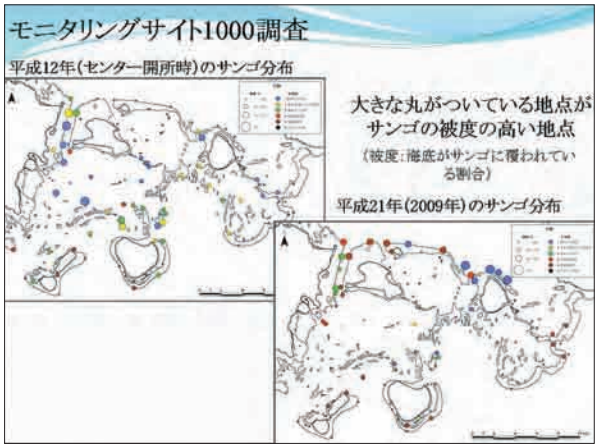
3：主な業務は(１)～(３)に上げる３つです。

4：サンゴ礁に関する情報の収集、整理及び提供を行っています。センターで収集した報告書等の情報はセンターHPから閲覧可能です。



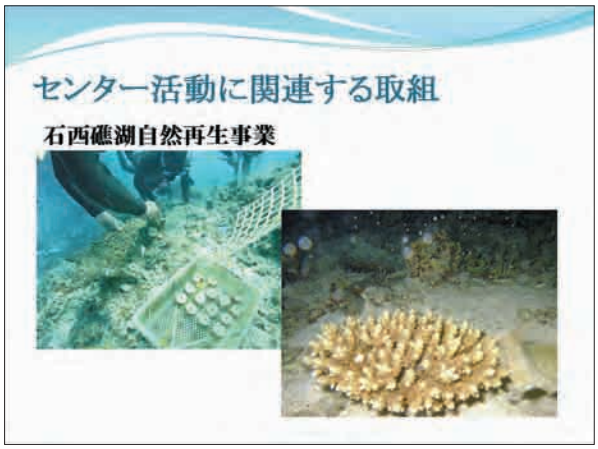
5：サンゴ礁の調査モニタリングは上記３つです。

6：平成10年の世界規模での大規模な白化現象と平成19年の白化現象の様子です。両方とも石垣島周辺で撮影されました。



7：平成12年と平成21年の石西礁湖のサンゴ群集モニタリング結果です。10年間で変化している様子がわかります。

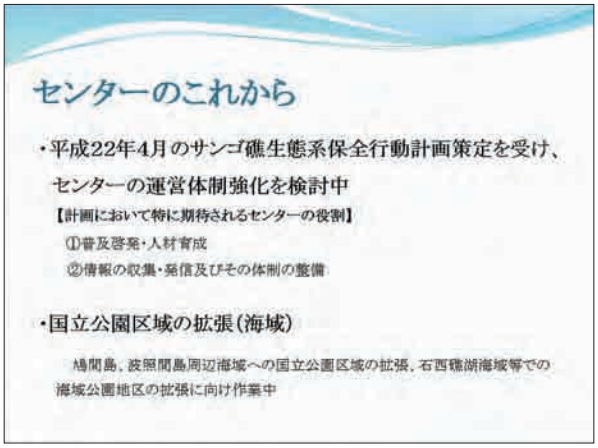
8：サンゴ礁保全に関する普及啓発活動にも力をいれています。スノーケル講習をメインにした海の自然教室の開催や学習教材としてサンゴ礁学習ワークブック(右上)を作成しました。(ワークブックはセンターHPからダウンロード可能)



9：石西礁湖自然再生事業が平成14年度から開始されています。平成17年度から有性生殖法によるサンゴ移植に取り組み、平成22年５月には、移植したサンゴの初めての産卵を確認することができました。

10：平成18年２月には、地元住民、市民団体、漁業や観光関係の団体、研究者、行政機関など多様な主体の参加による、石西礁湖自然再生協議会が発足し、協議会委員によりサンゴ礁保全に関する様々な活動が展開されています。

11：地域の皆さんと連携してオニヒトデへの対応にも取り組んでいます。



12：環境省では、平成22年４月にサンゴ礁生態系保全行動計画を策定しました。それを受け、運営体制の強化を現在検討しているところです。国立公園についても、区域や、海域公園地区の拡張に向けた作業を行っています。

国際サンゴ礁研究・モニタリングセンター開所十周年記念事業報告

観察会の報告

美ら海自然観察会「ボートスノーケリング」

サンゴセンター開所十周年記念事業の中で、地域の方に島の周りに拡がるサンゴの海で自然とふれあい楽しんでもらうことを目的とした観察会を実施しました。

このイベントは12月11日に船を借り石西礁湖のど真ん中へ行ってスノーケルをしようという企画です。通常この石垣自然保護官事務所が開催するスノーケル観察会は、夏頃にビーチエントリーでサンゴ礁を見てもらうものですが、今回は船の上からドボンッ！と海の中に入り多くの海の生き物達がすむサンゴ礁を体感してもらう開所十周年の特別企画としました。

時期は12月です。いくら温暖な八重山とは言え、北風が吹くとブルッとなります。「参加したいという応募はあるのか？」と不安に思っていたのですが、予想に反したくさんの申込みがありました。今回は船からのエントリーによるスノーケルなので、参加者を経験者に限定しましたが、下は９才（小学校５年生）から上は70才の方まで、幅の広い年齢層の方達が一緒に参加いただくことになりました。

天気を心配に思いながら迎えた当日。警報、注意報ともになく風も強くありませが、あいにくの曇り空。傭船を依頼した船長に電話で今日の海の様子を確認すると、波は穏やかで、予定通り船を出しスノーケルできるとの返答を頂き、寒さを心配しながら、開催しました。参加者30名、安全管理のためのスタッフ15名（西表石垣国立公園パークボランティア12名＋環境省職員３名）で海へ出発です。

今回のポイントは竹富島北沖。参加者とスタッフはグループごとにエントリーします。装備の確認をして、船長から潮流の情報を聞き、グループリーダーの指示の下、観察開始です。通常では見ることのできない、サンゴ群集や海の生き物達の様子を観察していただきました。最初足がつかないと不安に思っていた参加者達も自然とその美しさに取り囲まれて、寒さも忘れて楽しんでくれました。

観察がスタートしてからしばらくすると、スタッフのひとりに誘導され、一人の参加者が船に戻ってきました。あまり慣れていなく、疲れてしまったとのことでした。海では自分の技術を過信して事故が起こることがほとんどです。当日、自分のスキルを不安に思ったことを正直に話してくれた参加者、また事故が起こりそうな危険を察知して参加者をうまく誘導してくれたスタッフ達のすばらしいサポートのおかげで、無事に観察会が終了できました。主催者側としては、考えられる配慮を心掛け、色々な準備していたのですが、スタッフの皆さんは、事前に行ったスノーケルレスキュー講習会の内容を上手く自分らのモノにして観察会をフォローしていただきました。

観察終了後は、温かいお茶をだしました。寒い！と言われる方、思ったより寒くないね！と言われる方、様々な感想をお持ちのようでしたが、港に到着し解散するときは、皆さんから楽しかったとコメントを頂いたり、翌日にはお礼やまた参加したいと電話をくれたりした方もいらして、船を出して見に行く機会の少ないこの美しい海を無事に体験してもらえて、この観察会をやってよかったと心から思いました。たくさんの方々の支えをもらいながら、本当に楽しい観察会を開催することができました。参加してくださった皆さん、スタッフの皆さん、この場を借りて御礼申し上げます。

参加者集合写真

出発（船上にて）

入水前のドキドキ

器材を再チェック

参加者の様子①

参加者の様子②

観察した海中景観①

観察した海中景観②

観察会終了後サンゴタワシのプレゼント

国際サンゴ礁研究・モニタリングセンター開所十周年記念事業報告
展示会の報告
ヌングンジィマ展

国際サンゴ礁研究・モニタリングセンター（以下サンゴセンター）の開所十周年を機に一般の方がサンゴ礁保全への関心を育み、より理解を深めてもらうために記念展「ヌングンジィマ展」（ヌングンジィマはサンゴ礁）を平成22年12月12日（日）から12月26日（日）の２週間に渡り開催いたしました。

展示オープニングは前のページで紹介した開所十周年記念式典の直後。オープニング日はたくさんの方がサンゴセンターを訪れて下さいました。開催期間中にサンゴセンターを訪れて下さったのは、ご記帳にお名前を頂いた方だけで300名弱。他にもセンター近所にある八島小学校２年生38名と５年生47名も訪れてくれました。

記念展示は「サンゴ礁をイメージする」「サンゴ礁に関わる美しい海中、海上、文化景観を楽しむ」「石西礁湖を知る」「サンゴ礁保全に関わる取組みを知る」という４つのコンセプトをもとにゾーン分けをして会場設営をいたしました。本コーナーでは記念展を振り返り紹介したいと思います。

ヌングンジィマ展のパンフレット

展示のオープニングは八島小学校５年生作成のサンゴ礁の海をイメージしたジオラマです。

ゾーン１＝サンゴ礁をイメージする＝

記念展示のエントランスともいうべきコーナーです。

サンゴセンターに入ってまず目に入るのは八島小学校５年生の皆さんに作成してもらったサンゴ礁のジオラマ。そしてサンゴ礁の映像や標本を展示しました。

サンゴ礁という言葉を聞いてどのような生態系をイメージするかは人さまざま。子どもたちは夢のような世界を描き、長年サンゴ礁を見つめてきた研究者はサンゴ礁に流れる時間を含めた四次元的な空間を想像するかもしれません。最新のテクノロジーは３D 映像でサンゴ礁の姿を描写することができます。そしてサンゴの骨格標本を展示し、なかなかゆっくり見ることが出来ないサンゴの造形美を訪問者の方にご覧いただきました。

サンゴの骨格標本の展示。たくさんの種類のサンゴの骨格を改めて見て感動された方も多かったです。

ソニー株式会社の協力で実現したサンゴ礁の海の３D 映像展示。生きものが飛び出て見えるので右の子のように思わず手を伸ばしてしまう様子も見られました。

ゾーン２＝サンゴ礁に関わる美しい海中、海上、文化景観を楽しむ＝

このゾーンはサンゴ礁景観を含み、それを取巻く島の文化を伝えるコーナーです。ここでは八重山諸島で35年以上に渡り、写真を撮影されてきた大塚勝久先生にご協力を頂き、サンゴ礁の写真から生物、海に携わって暮らす人々の写真展を開催することが出来ました。

海人のモリで突かれてコブシメが墨を吹き上げる瞬間、台風に耐えるサトウキビ、穏やかな浜での「布さらし」、そして見事な八重山の海のサンゴ礁景観の写真の数々。紙面だけでは伝えきれませんが見る者すべてが魅了される素敵な写真ばかりでした。この場を借りて改めて大塚先生に御礼申し上げたいと思います。なお先生の写真パネルはこの十周年を記念してサンゴセンターで保管しており、時折サンゴセンターで展示したいと思います。

大塚勝久先生の写真と見学の子供達。被写体としての八重山の魅力を先生ご本人からお話いただきました。

大塚先生の話を真剣に聞く子供たち。改めて島の自然に目を向ける機会になったなら嬉しいです。

ゾーン３＝石西礁湖を知る＝

サンゴセンターは石垣島の海からほど近いところに建っています。周りの海は日本最大のサンゴ礁海域である石西礁湖が拡がり、活動フィールドでもあります。もちろん八重山の人にとっては生活の場でもありとっても身近な海です。ここでは石西礁湖のサンゴ礁の姿や環境省の取組みを紹介しました。石西礁湖に浮かぶ美しいサンゴ礁に縁取られた島々の写真、そこに暮らす生きものたちの姿、そして環境省が実施しているサンゴ群集修復事業の取組み、オニヒトデや陸域からの生活排水や赤土の流入などサンゴ礁の攪乱要因となる事象なども紹介しました。

環境省のサンゴ群集修復事業紹介コーナーにも子供達がいました。大人たちが本気になって知恵を絞っても、サンゴ礁生態系の修復にはたくさんのお金と長い時間がかかること、最も大事なのは今でも元気なサンゴや生きものを守ることだよ、と伝えました。

こちらはサンゴを食べることで有名なオニヒトデでの展示コーナー。名前は知られている生物ですが、なかなか実物を見る機会は少ないかもしれません。その姿を始めて見た方は大人でも子供でも驚く方が多かったです。

ゾーン４＝サンゴ礁保全に関わる取組みを知る＝

サンゴはローカルな環境からも影響を受ける生態系であり、地球規模の気候変動などグローバルな影響を受ける生態系でもあります。美しいサンゴ礁を未来に残すため、さまざまな取組みが行なわれています。ローカルな影響をなるべく小さくしようという取組みは八重山でもたくさんの関係機関や有志の皆さんにより進められています。一方、世界的な動きでは平成22年10月には名古屋にて「生物多様性条約第10回締約国会議」（COP10）が開催され、海域の保全についても話が行なわれ、海域の10%を保護区域にするという目標が掲げられました。

このゾーンではサンゴ礁保全に係るローカル的な取組み、グローバル的な取組みを合わせて紹介するコーナーとしました。

美ら海・美ら山募金推進協議会、ＷＷＦしらほサンゴ村、石垣島エコクラブ、西表森林環境保全ふれあいセンター、石垣ビーチクリーンクラブといった八重山で活躍されている皆様にご協力頂き展示ができました。皆さん、自身の活動に誇りを持っており、素晴らしい展示を頂きました。

COP10関連の取り組みを紹介したコーナー。八重山地方にも貴重なサンゴ礁や固有の生きものが生息しており世界的な生物多様性保全にとっては重要な場所です。

石垣島ビーチクリーンクラブと石垣島エコクラブの展示の様子です。

手前のシーサーは陸から流れた赤土から作成されました石垣島エコクラブの取組みです。

西表森林保全ふれあいセンターの展示。西表島の森林保全の取り組みを紹介していただきました。

頂きました。

サンゴセンター開所十周年記念ヌングンジィマ（サンゴ礁）展はたくさんの方のご支援を頂き、開催することが出来ました。この場を借りて、ご協力を頂いた以下の方々に厚く御礼を申し上げます。

ゾーン１
・石垣市立八島小学校５年生の皆様（サンゴ礁のジオラマ製作）
・ソニー株式会社様（サンゴ礁の３D 映像のご提供）
・九州大学大学院　理学研究院理学部附属天草臨海実験所
　准教授 野島　哲先生（石西礁湖のサンゴ礁映像のご提供）
・有限会社 海游　吉田　稔様、本宮　信夫様（サンゴの骨格標本の同定）

ゾーン２
・大塚勝久写真事務所　大塚　勝久様（写真パネルの製作）

ゾーン４
・美ら海・美ら山募金推進協議会様
・ＷＷＦジャパンサンゴ礁保護研究センター「しらほサンゴ村」様
・石垣島エコクラブ様
・西表森林環境保全ふれあいセンター様
・石垣ビーチクリーンクラブ様

国際サンゴ礁研究・モニタリングセンター開所十周年記念事業報告

展示会の報告

ヌングンジィマ展
八島小学校５年生　ジオラマ作成

展示会のエントランスを鮮やかに飾ったジオラマ。八島小学校５年生の皆さんの作品です。ジオラマの作成に至までの様子を報告します。

十周年記念展示「ヌングンジィマ展」の開催が決まったときにエントランスをサンゴのジオラマで飾りたいというアイデアが職員の中から出てきました。そこで、土台になるサンゴ礁の部分を石垣自然保護官事務所の職員が、サンゴや生き物達をサンゴセンター近くにある八島小学校５年生の生徒さんで作成することになりました。

紙粘土を用いて思い思いの生き物（サンゴや魚たち）を作ってもらうことになりましたが、意外にも「サンゴについてよくわからない」という意見が多く出ました。そこで、実際にサンゴを見てもらう目的で小学校近くの真栄里海岸でコーラルウォッチを2010年11月８日に行い、サンゴに触れてもらう機会を作ることから始まりました。日頃、海には行くけどサンゴをじっくり見たことはないという子ども達も多く、八島小学校５年生は自分たちのマイサンゴを決めて色や形について調べました。この調査は２回目を2011年３月８日にも行っています。

11月25日には、実際に紙粘土を使って自分たちが見てきたサンゴを作ってもらいました。始めに、比屋根自然保護官補佐がイノー（礁池）の生き物達や特長について説明した後、みんなが感じる海の生き物を作りました。サンゴだけではなく魚やイソギンチャクなど実に様々な生き物達を自由に発想して作っていきました。

そしていよいよ自分たちで作った作品を土台に付けていく作業です。学校で色づけやニス塗りで完成させた作品はどれも色や形は個性的で鮮やかに出来上がっています。それらを12月７日にサンゴセンターに来て頂き、皆さん思い思いの場所で貼り付けていきました。

みんなでワイワイしながら､「ここに置きたい」「あそこに置きたかったのに」など賑やかな中で作品は完成です。

八島小学校５年生の力で作られたジオラマ。十周年記念展示ヌングンジィマ展のメインエントランス正面に置かれました。展示会に来て頂いた皆さん、５年生の力作に一様にびっくりされていました。すぐ目の前にある風景がこんなにもすてきな世界が広がっていることを改めて感じる作品となりました。これからもセンターにずっと飾っています｡是非､みなさん足を運んでくださいね。

真栄里海岸でのコーラルウォッチ風景

小学校でのジオラマ作成風景

自分たちでつくった作品を土台に
（サンゴセンターにて）

作成に関わって頂いた
八島小学校５年生のみなさん

2010年(平成22年)に十周年を迎えた国際サンゴ礁研究・モニタリングセンター。十年の間に関わった職員からメッセージを頂きました。

歴代石垣自然保護官事務所職員からのメッセージ

「モニタリングセンター」から10年

環境省自然環境局自然環境計画課　生物多様性地球戦略企画室
室長補佐　川　越　久　史
（石垣自然保護官事務所在職期間　平成11～12年度）

2000年５月に「国際サンゴ礁研究・モニタリングセンター」が石垣島に開所して10年が経過しました。私はサンゴセンターの建設段階から開所して１年位までの間を石垣島で過ごす機会に恵まれました。また、その後も１年半ほど那覇で勤務する機会があり、幾度となく、かつての勤務地であるサンゴセンターを訪れることになりました。

開所当時、八島町の埋立地に突如現れた建物は地元の人たちにとっては「謎の施設」だったらしく、「そこは何をしているとこかね？」「モミタリングって何だ？」などと聞かれることが度々でした。

その頃のセンター職員は計３名。駐車場周辺の草刈りを始め、それぞれが何でもやらなければいけないような状態でした。また、予算面でも極めて悲惨な状況にあり、今となってはサンゴセンターの主要業務である広域モニタリングさえも存続の危機に面するような有様でした。しかし、それを口実にモニタリングと称する巡視に出かけ、自分の目で八重山のサンゴ礁を数多く見ることができたことはかけがえのない経験となりました。その後、那覇に勤務することとなった際には、石西礁湖自然再生事業の立ち上げや石垣島の国立公園編入といった作業に関わることになりましたが、石垣島での経験がその作業を進める上での基礎となったことは言うまでもありません。そして、沖縄から離れた今も、ほぼ週１回のペースで海に通っていますが、これも八重山での経験を通じて、行くたびに違う表情を見せてくれる、海の底知れぬ魅力を知ってしまったからに他なりません。

現在はセンターの職員も増え、予算面でも開所当時のような状況は脱するなど、あの頃から比べると隔世の感があります。しかし、「サンゴ礁の保全」という目標にゴールはなく、取り組むべき課題は以前にも増して多くなっています。おそらく、サンゴセンターの職員はデスクワークに追われる日々？が続いていることと思います。この10年間、サンゴセンターでは試行錯誤を繰り返しながらも、地元の方々や研究者の方々などのご協力を得て、モニタリングをベースとした活動を展開してきました。そして、今後もその考え方自体は変わらないのではないかと思います。私はこのニュースレターの第１号で「皆さんも自分たちの身のまわりに広がるサンゴ礁を見守って下さい」といったことを書きました。地元の小学生が遊びに来てくれたり、研究者の方が研究拠点として使ってくれたりと、サンゴ礁の見守り方はそれぞれですが、サンゴセンターがいつまでも“アクティブなセンター”として八重山の地に根付いていくことを願ってやみません。地元の小学生が遊びに来てくれたり、研究者の方が研究拠点として使ってくれたりと、サンゴ礁の見守り方はそれぞれですが、サンゴセンターがいつまでも“アクティブなセンター”として八重山の地に根付いていくことを願ってやみません。

写真：石西礁湖での巡視（本人提供）

2010年（平成22年）に十周年を迎えた国際サンゴ礁研究・モニタリングセンター。十年の間に関わった職員からメッセージを頂きました。

歴代石垣自然保護官事務所職員からのメッセージ

国際サンゴ礁研究・モニタリングセンター開所十周年によせて

環境省京都御苑管理事務所
普及指導企画官　高　橋　博　幸
（石垣自然保護官事務所在職期間　平成11～13年度）

国際サンゴ礁モニタリングセンターの10年前の開所の携わったスタッフとして当時の想い出をふりかえりたいとおもいます。

合同庁舎からセンターへ

平成11年７月に西表国立公園管理官（当時）として赴任、当時は川越管理官と石垣合同庁舎の３階の一室で、西表国立公園の管理業務と海域関係として石西礁湖及び石垣島サンゴ礁モニタリング調査の調整等の業務を行っていました。

ゆったりとした気候や風土、２人だけの職場、のんびりと仕事ができる環境かとおもいきや、センターの工事も着々と進み、翌年５月12日に国際サンゴ礁研究・モニタリングセンターが開所することになりました。センターの運営体制も管理官２名とモニタリング活動業務の補佐員として海中公園センター（当時）から１名派遣されて３名での船出となりました。

開所式までに事務所の引越し、センター内の機材や施設の準備、開所式､祝賀会､開所記念シンポジウムの調整や準備と慌ただしく､なんとか開所の体制が整いました。

開所

準備も整い５月12日に無事に開所式と祝賀会が開催されました。石垣市町、竹富町長の他たくさんの関係者に参列していただき、特に祝賀会は盛大に開催することができました。翌日には「サンゴ礁の今を見るーサンゴ礁保全のためのモニタリング」※１と題した開所記念シンポジウムも開催しました。大きなホテルの会場を借りて、サンゴ礁のシンポジウムで人が集まるか不安でしたが約200人の参加者があり、島の人も海やサンゴ礁に興味をもっていると感じました。

管理運営

開所式も終わり、これからは東アジアのサンゴ礁保全活動の拠点であるセンター職員の一員としての顔も必要になりました。サンゴ礁の知識といえばダイビングで知り得た薄っぺらな知識しかなく、問合せや質問があったらどうしようか不安でした。

しかし、その心配はまったくありませんでした。そもそも地元人にはまったくと言っていいほど認知されていませんでした。（開所して間もないため仕方ないのですが・・・）場所も国道から離れた目立たない場所にあり、案内標識もない、たまにサンゴセンターを知っているという人は白保のＷＷＦサンゴ礁保護研究センター※２と間違えていました。

しかし、建物に興味をもって訪れる地元の人、写真展※３を取り上げてくれるマスコミ、研究者、自然保護団体、ダイビング関係者との繋がりによりごく一部の人にはセンターの存在や業務が理解されてきていました。

私自信も少しでもサンゴ礁や八重山の海の現況や知識を得るためにモニタリング調査、リーフチェックへの同行、また、勤務時間外にも積極的に海域調査と称したダイビング、魚類調査と称したジギング（釣り）、地元への普及啓発（飲屋さんでセンターを紹介）に頻繁に行くことで、八重山の海やサンゴ礁の現状を知ることもでき、微力ながらセンターの存在をPRすることができたとおもいます。

終わりに

八重山を離れて９年。今では活動や取組も軌道に乗ってきたとおもいます。石西礁湖自然再生、オニヒトデ対策等課題もたくさんあるとおもいますが、センター職員の皆様のご健勝を祈っております。

※１）開所記念シンポジウム「サンゴ礁の今を見るーサンゴ礁保全のためのモニタリング」
・スライド＆トークショー「ファインダーを通じてみたサンゴ礁の変遷」水中写真家館石昭氏
・基調講演「サンゴ礁モニタリングとは」東北大学西平守孝教授
・土屋誠琉球大学教授の司会によるパネルディスカッション
※２）別名「しらほサンゴ村」。同じ年の平成12年４月に開所しました。事務所主催の「海の自然教室」にも協力してもらいました。
※３）吉嶺善二氏撮影によるサンゴ礁関連の写真パネルを作成し写真展を開催（開所から２ヶ月）しました。

開所記念シンポジウムの様子

2010年（平成22年）に十周年を迎えた国際サンゴ礁研究・モニタリングセンター。十年の間に関わった職員からメッセージを頂きました。

歴代石垣自然保護官事務所職員からのメッセージ

すぐそばにある自然

環境省自然環境局総務課　動物愛護管理室
指導企画係長　鈴　木　祥　之
（石垣自然保護官事務所在職期間　平成14～15年度）

私が石垣島に赴任していた２年間で一番泳いだのは、モニタリングセンターの東側の真栄里のサンゴ礁だった。モニタリングセンター主催の「海の自然教室」でも使っていたポイントだ。土日に天気が良ければ、車にスノーケル器材とタオルと水を積んで、妻とあちこちスノーケルに出かけていたが、真栄里の海が私たちのお気に入りだった。防波堤のところまで車を横付けできて、海へのアクセスがよいためである。

ここの良いところは、「手軽に」行けて、「危険が少なく」、「ひととおりの色・形のサンゴ」が「コンパクトにかたまって」みられることだ。ハマサンゴのマイクロアトールが点在していて、疲れたときに休憩しやすいのも良かった。後ろは石灰岩の岸壁で、天然護岸になっていて民家などの人工物があまり見えないのも気持ちいい。特に被度・群度や透明度が高かったり、珍しい生き物がいるわけではない。逆に防波堤の脇にある排水口から生活排水が流れ出ていてあまりきれいじゃないな、という印象が強い。時々、海藻を採っている地元住民やダイビングショップの船（冬季の北風のとき）、まれにサバニ船の姿を見かけることもあって、人に身近な海でもある。

このような人の生活と関わりの深い海は、白保をはじめ八重山では珍しくないけれど、意外にもサンゴ礁を泳いだことがないという島の人が多いと聞いて、最初は驚いた。あまりにも身近すぎて興味が向かない、または海は怖いというイメージが強いためだ。そんなわけで、在任２年目はパークボランティアの皆さんの協力を得て「海の自然教室」や子供パークレンジャーでサンゴ礁の総合学習を一生懸命やった記憶がある。少しでも島の人たちにサンゴ礁の美しさや素晴らしさを体験してもらいたいためだ。霧中になって生き物を探す子どもたちや、そんな孫の姿を見て楽しそうなおじぃを見ると、こちらも嬉しい気分になった。

当時は漠然と、ここのサンゴ礁だけはなんだかんだでずっと残っていくんだろうな、と楽観視していた。しかし４年前に、海水温上昇に強いとされるハマサンゴでさえも堪えきれなかった白化現象が起きて、「海の自然教室」もここでは開催されなくなったと聞く。他にもオニヒトデの大量発生など、まだまだ原因対策さえ分からない相手にサンゴを守っていくのは、特に島の人たちにとってしんどいことじゃないかと思う。それでも島の人たちが海を見続けて、そこから気づいたことなどを活かして、サンゴを保全していくことが大切である。

「島人ぬ宝」の歌詞の２番目は、まさにそのことを歌っていると思う。在任中にちょっとはそのお手伝いができたんじゃないかと、この歌を聴いていつも感じるところである。

真栄里海岸の様子

真栄里海岸の様子

2010年（平成22年）に十周年を迎えた国際サンゴ礁研究・モニタリングセンター。十年の間に関わった職員からメッセージを頂きました。

歴代石垣自然保護官事務所職員からのメッセージ

いつまでもサンゴ礁が身近なものであるように

鹿児島大学教育センター
特任准教授　岡　野　隆　宏
（石垣自然保護官事務所在職期間　平成15～17年度）

海の無い故郷に育った私は、サンゴ礁は遠い海の果てにあるものと思っていました。石垣島に来て、最初に驚いたのはサンゴ礁が島のすぐ近くにあること。水中メガネ越しのサンゴ礁にはしゃぎ、ふと顔をあげると、家が見える。車が見える。そう、モニタリングセンターの目の前の海がそうであるように！そして、単に場所が近いというだけでなく、暮らしや遊びを通じて、島に住む方々の気持ちの中でも身近であることも。

私が国際サンゴ礁研究モニタリングセンターに勤務したのは、2003年から2005年にかけての２年半でした。当時の八重山のサンゴ礁は、1998年の大規模な白化から回復傾向にありましたが、回復の程度は場所によって違い、オニヒトデの大発生が懸念されていました。そこで、今の石西礁湖自然再生につながる様々な調査、専門家の皆さんとの会議、地元方々との意見交換会などさせていただきました。そして、とても多くの方々にお世話になり、いろんなことを学ばせて頂きました。

中でも印象に残っているのは、オニヒトデ対策の会議で、海人やダイバーの方々に集まって頂いて、時に厳しく、また激しく議論しながら、一緒に悩ませていただきました。また、高校生に集まってもらった意見交換会では、海に対する思いと、海のためにどうしたらいいのか考える真剣な姿に触れることが出来ました。

サンゴ礁が身近にあるということは、一方で人の生活の影響をとても受けやすいということです。私が勤務していた頃、一番回復が遅れていたのはイノー（礁地）でした。

今、八重山では石西礁湖自然再生など、サンゴ礁を未来につないでいく取組が、多くの皆さんの力で進められていると聞いています。いつまでもサンゴ礁が身近なものであるように、心から祈っています。

写真：ハナゴイの根（本人提供）

写真：カタグァー（本人提供）

写真：米原サンゴ（本人提供）

2010年（平成22年）に十周年を迎えた国際サンゴ礁研究・モニタリングセンター。十年の間に関わった職員からメッセージを頂きました。

歴代石垣自然保護官事務所職員からのメッセージ

島人とともに

環境省中部地方環境事務所　国立公園・保全整備課
課　長　野　村　　環
（石垣自然保護官事務所在職期間　平成17～18年度）

＜人のつながり＞

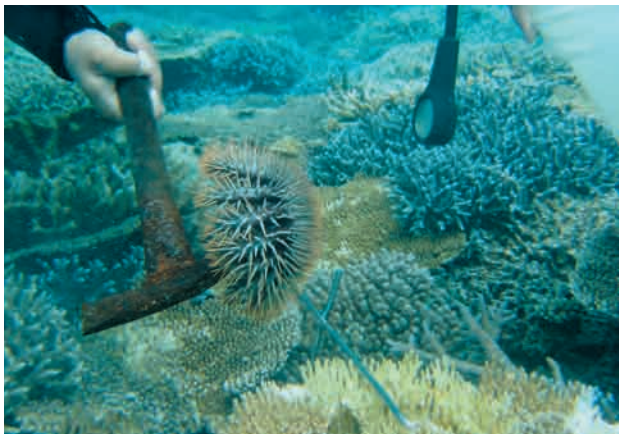
先日、思わぬところで八重山漁協組合長の上原亀一さんのお名前を聞きました。私は現在、中部地方環境事務所で伊勢志摩国立公園の仕事をしていますが、伊勢志摩でも海域公園地区の指定に向けて地元漁協との話を始めています。そこで、鳥羽磯部漁協常務理事の藤原隆仁さんから、「昨年10月に石垣島に行ったとき、上原組合長に大変お世話になった。」との話を伺いました。私も当時、上原組合長に言葉で尽くせないほどお世話になったので、石垣島での出来事が次々に蘇ってきました。石垣島の海中公園地区の指定に際して、海人の皆さんには各組の地域懇談会で説明を行ったのですが、上原組合長は「これは、海人にとっても困ることではないから」と話してくださいました。説明は私たちからするわけですが、こちらは海人同士が普段話しているような言葉は出てこないですし、海人の言葉で分からないところもあります。そういったやりとりをうまく取り成していただいたのです。上原組合長が島のため、海のためになると思って動いてくださったからこそ実現できたことであり、本当にありがたいことでした。

＜島の人が先生＞

八重山の海は、間違いなく国内随一です。でも私は、偉そうなことは言えません。石垣に赴任するまでこんなに素晴らしい海が日本にあることを知りませんでした。便利さや発展は誰もが望むことであり、それを妨げることはできません。しかし、一度壊してしまった海を元に戻すのも相当大変です。「サンゴは、いくら網で引っ掛けてもすぐ再生してきた」「ギーラは、もっと大きいのがゴロゴロあって、シラヒゲウニも山ほど獲れた」「海の水はもっと透明だった」といった話を方々で聞きました。島の人から昔の話を聞くことで、石西礁湖の自然再生とは何をすればいいのか、ということへの答えが見えてきました。自然再生協議会の地道な取組が一気に花開く時がやがてやって来ると思います。八重山の海がかつての姿を取り戻し、まず島の人が喜んでくれて、島に訪れる人も素晴らしい自然に触れられて、島の豊かな自然もその営みを続けていくことができる、そんな日がきっと来ると思います。

＜石垣島を国立公園に＞

何といっても忘れられないのは、11回を重ねた国立公園指定の説明会です。市民会館を含めて３箇所で開催した説明会だけでは、なかなか島の人一人ひとりに国立公園のことを伝えることができませんでした。やはり直接顔を合わせて、国立公園の指定で何が変わるか丁寧にお話ししなくてはならないだろうということになりました。各公民館・字会への説明会を開き、国立公園指定についてご理解いただけるに至ったと思います。



＜島の人とともに＞

１年半で果たして何ができたか分かりません。正直、私も初めはなかなか島の人たちの中に入っていけてなかったと思います。ある時、島の人に「お前は何をしたいんだ」と聞かれたことがありました。それをきっかけに、自分の思いや考えを躊躇なく言えるようになった気がします。いまでも忘れられない一言です。島の人とともに島を良くしようとしていた「さんごレンジャー」の思いをこれからも忘れずにいこうと思います。八重山の皆様ありがとうございました。これからもよろしくお願いいたします。

写真：本人提供

2010年（平成22年）に十周年を迎えた国際サンゴ礁研究・モニタリングセンター。十年の間に関わった職員からメッセージを頂きました。

歴代石垣自然保護官事務所職員からのメッセージ

初めてのレンジャー経験となった八重山

環境省東北地方環境事務所　大船渡自然保護官事務所
自然保護官　久保井　喬
（石垣自然保護官事務所在職期間　平成18～19年度）

私は、平成18年度から２年間、石垣自然保護官として国際サンゴ礁研究・モニタリングセンター（石垣自然保護官事務所）に勤務した。私にとって初めての現地となった八重山での経験は、私のレンジャー（自然保護官）としての重要な基礎になっている。ここでは、特に記憶に残る石垣島への国立公園拡張と、子どもパークレンジャーについて振り返ろうと思う。

石垣島への国立公園拡張は、私の重要なミッションであり、約20年に及んだ作業の締めくくりに携われたことを誇りに思っている。島の陸地の約３分の１に当たる7,000ヘクタール以上が指定され、釧路湿原国立公園の指定以来の大規模なものであった。ひとつの目玉は、海中公園地区（現在は海域公園地区）の指定であった。白保をはじめとして米原、川平石崎、平久保の４つの海中公園を指定したもので、既存の石西礁湖の海中公園と合わせると、西表石垣国立公園の海中公園地区は、当時の全国の国立公園の半分近くを占めることとなった。この規模からも、八重山の海のすばらしさをうかがい知ることできる。

指定に当たっては、各地区で説明を行ったが、複数の地区で海域公園地区をもっと広く指定して欲しいという意見があり、地域の皆さんがどれだけ海を大事にしているか、守っていきたいかという思いを強く感じさせられた。これを受け、モニタリング結果のあった白保では、さらに広げることなった。

指定を終えて、新米レンジャーだった私が痛感させられたのは、海中公園地区になったからといって、その海が守られる訳ではないという当たり前のことだった。指定直後、海中公園地区内で熱帯魚が採られているという連絡が相次いだ。事務所から現地までは約30分かかり、間に合うことがなかった。張り紙などにより、地道な広報で、海中公園地区の場所や、保護されていることについて地道な広報を行うとともに、海上保安庁と連携したパトロールを行ったり、地域の詳しい方に自然公園指導員になっていただき、管理強化を目指した。

もうひとつの思い出深い経験は、子どもパークレンジャーである。八重山の子どもパークレンジャーは、小中学校の総合学習と連携して行うことが特徴で、地元の小学生とともに、地元の海について学習した。富野小学校では、海中公園地区に指定された米原でスノーケルによるサンゴや熱帯魚の観察を行ったり、色によるサンゴの健康診断・コーラルウォッチを行った。スノーケルを初めて行った子どもがほとんどで、初めて見るサンゴの美しさに強く感動していた。サンゴを石だと思っていた子どもたちが、年度末の学習発表会で学んだことを劇として発表を行い、父兄にサンゴの海を守ることの大切さを訴えたときは、私自身も感動したことは今でも忘れない。

翌年からはじめたコーラルウォッチは、折しも大規模な白化現象が起こった年に行う結果となり、サンゴが色を失っていく様子を経時的にとらえ、全国からも注目された。子どもたちにとって、この子どもパークレンジャーがよい経験となっていること、島や海を大事にする心が今も根付いていることを願いたい。

私はスクーバダイビングが趣味で、パラオやフィリピンの海で潜ってきたことがある。これらの海域は、世界でも有数のサンゴの種類が豊富なところだが、行くたびに感じることは、八重山のサンゴ礁はこれらの海域に決して負けていないということである。あくまで直感的な感覚なのだが、八重山のサンゴの形態や色彩から受ける多様性の印象は、比較しても豊かに感じてしまうのである。八重山だけでなく、日本の宝とも言えるこのサンゴ礁が、将来にわたって守られていくことを期待したい。

私は、現在、同じく海の公園である陸中海岸国立公園のレンジャーとして岩手県大船渡市で勤務しており、八重山での経験と同じように海域公園地区の指定に向けて取り組んでいる。三陸海岸の海は、八重山のようにサンゴや白い砂、青い海などの彩色豊かな海ではないが、海の中の海藻の海中林や、場所によっては落差200m に及ぶ大断崖、リアス海岸の岬と海が交互に織りなす景観の美しい地域である。八重山と同様に、この地域の海の保全に役立つ国立公園を目指していきたい。

富野小学校子どもパークレンジャーの風景（平成19年撮影）

2010年（平成22年）に十周年を迎えた国際サンゴ礁研究・モニタリングセンター。十年の間に関わった職員からメッセージを頂きました。

歴代石垣自然保護官事務所職員からのメッセージ

シマヌサチニガティ（島の幸せを願って）

環境省自然環境局自然環境計画課　生物多様性地球戦略企画室
持続的利用係長　廣　澤　　一
（石垣自然保護官事務所在職期間　平成19～20年度）

2007年４月から2009年３月までの２年間、西表石垣国立公園のサンゴ保全を担当していました。現在は東京の環境省において、失われつつある生物の多様性を保全することの重要性を皆さんに呼びかけ、取り組んでもらうという業務に携わっています。もうすっかり東京生活に馴染んでしまいましたが、休日は三線教室に通い、沖縄料理屋を見かければふらっと吸い込まれ、ラーメンに島胡椒をたっぷりかけるというように、島暮らしの名残はまだまだ健在です。

島での生活は季節差が少ないせいか、とても長く感じられ、変化のない日々に刺激を求め、休日はほとんど海や離島で過ごしていました。一方、仕事の方は質・量ともに十分過ぎるほど刺激的でしたが、未知の案件に知識の未熟さが災いして、思うように進められなかったり、大切なチャンスを逃してしまったりというケースがほとんどでした。

とくに、2007年夏の大規模白化とその後に続いたオニヒトデ大発生は、私にとってサンゴ保全とは何かを考える大きなきっかけであり、大きく立ち塞がった壁でした。先住者と移住者との自然観の違い、観光業・水産業・農業従事者など多様な立場から生まれる利害関係、広大なサンゴが衰退していく中で決定的対策を打ち出せないという限界など、多くの問題が絡み合い、目指す道を求めてさまよい続けるばかり。何かを成し遂げたという実感のない、苦い記憶が蘇ってきます。

ただ、振り返ってみると、石西礁湖自然再生の全体構想や環境省事業実施計画の策定、常時モニタリングの海況観測開始、東アジアサンゴ礁保全国際シンポジウムの開催など、周囲の皆さんに叱咤激励をいただいているうち、いつの間にか形になったものもあります。また、サンゴ移植やオニヒトデ駆除への同行、自然再生協議会の運営などを通して、皆さんのサンゴに注ぐ熱い思いに触れたときは、身震いしてしまうほど感激する瞬間でした。酒と船が苦手という致命的欠陥をもつ私でも、温かい島民の皆さんと接するうち、すっかり仲間入りした気分にさせていただきました。

当時はサンゴ保全が一義的な職務だと信じて、それればかりを追求していました。しかし、今思うことは、サンゴ保全の先にある、島民の皆さんの幸せとは何かを感じとることが本当の使命だったような気がしてなりません。

島では、まさに多種多様、そして独特の人間模様を垣間見ることができました。このことは私の財産としていつまでも心に留めておくつもりです。全ての皆さんに深く感謝し、全体構想に描かれた幸せな笑顔が未来永劫、島に降り注ぐよう心よりお祈り申し上げます。

写真：本人提供

国際サンゴ礁研究・モニタリングセンター10年のあゆみ（年表）

年	センター、石垣自然保護官事務所等の動き	サンゴに関する動き	職員		
			自然保護官（レンジャー）	自然保護官補佐（アクティブレンジャー）	その他
昭47	5月　西表国立公園指定 7月　西表国立公園管理事務所　竹富町役場内に開設（保健婦詰所）		澤田、友利、水野		
49	4月　オニヒトデ駆除事業開始（～平成9年度）				
52	7月　海中公園地区指定				
53	4月　竹富島ビジターセンター開所				
58	12月20日　黒島ビジターセンター開所	モニタリングサイト1000調査前身の広域モニタリング開始			
平7	7月12日　西表野生生物保護センター開所 7月1日　地区事務所が石垣から那覇に移転	国際サンゴ礁イニシアティブ（ICRI）設立			
9	国際サンゴ礁研究・モニタリングセンター基本構想作成	国際サンゴ礁年 2月　ICRI第2回東アジア海地域会合が沖縄で開催される 11月　日本サンゴ礁学会設立			
10	国際サンゴ礁研究・モニタリングセンター実施設計作成	世界中で大規模な白化現象が発生			
11	国際サンゴ礁研究・モニタリングセンター建設工事着工				
12	5月12日　国際サンゴ礁研究・モニタリングセンター開所		川越、高橋博		鈴木
13	1月　環境庁から環境省へ　石垣支所設置 1月　ニュースレター創刊 体験的に学ぶ「サンゴ礁」（ティーチャーズガイド）発行 サンゴブック（小学生のためのサンゴ学習ワークブック）発行		石垣支所：川部、森永 自然保護官：高橋啓、高橋博		木村
14	3月　GCRMN東アジア海域ワークショップ開催 石西礁湖自然再生調査開始		石垣支所：川部、森永 自然保護官：高橋啓、鈴木		上野、濱崎
15		1月　自然再生推進法施行	石垣支所：川部、郷原 自然保護官：岡野、鈴木		上野、濱崎
16	オニヒトデ対策事業実施（～22年度継続中）	6月　第10回国際サンゴ礁シンポジウムが沖縄で開催される	石垣支所：三城、郷原 自然保護官：岡野、嶋崎		上野、濱崎
17	石西礁湖自然再生マスタープラン策定 1・2・サンゴ！（ティーチャーズガイド）発行 11月　ニュースレターを“Lagoon”にリニューアル	環境省にサンゴ礁保全専門官が設置される	野村、嶋崎	豊島	
18	那覇自然環境事務所発足 2月　サンゴ群集修復事業による初めてのサンゴ移植 2月　石西礁湖自然再生協議会発足		野村、久保井、落合、小畑	豊島	小林
19	9月　公園区域拡張、西表石垣国立公園に 9月　石西礁湖自然再生全体構想策定	八重山で大規模な白化現象が発生 八重山でオニヒトデが急増	久保井、落合、小畑、廣澤	佐藤崇	小林
20	6月　石西礁湖自然再生事業環境省事業実施計画策定 7月　石西礁湖常時モニタリングブイによる海況観測開始 11月　東アジアサンゴ礁保全国際シンポジウム2008開催	国際サンゴ礁年2008	田村、竹永、廣澤	佐藤崇、勝部	小林
21	太陽光発電設備増設	8月　八重山オニヒトデ対策協議会発足	田村、竹永、佐藤大	佐藤崇、勝部	小林
22	5月　移植サンゴ初産卵 12月12日　センター開所十周年記念式典	4月　サンゴ礁生態系保全行動計画策定	田村、渡瀬、佐藤大	比屋根、勝部	小林

写真でふりかえる国際サンゴ礁研究・モニタリングセンター10年

平成12年５月12日のサンゴセンターオープニングセレモニーでのテープカットの様子。

開所式典の様子。５月の石垣なのでかなりの暑さになっているはず。でも今では当たり前のかりゆしウェアの方がいないですね。年月の流れを感じます。

オープン時の施設見学の様子から一コマ。やっぱり内部も綺麗です。

開所２周年（平成14年）のイベント。センター周辺で生きもの観察会を開催いたしました。

開所３周年（平成15年）はサンゴ礫を使ったクラフト教室を開催しました。現在も使われているサンゴセンターの看板（写真左側の縦長の看板）はこの時作成されました。

開所４周年（平成16年）イベントの様子。嶋崎自然保護官が活躍されています。

開所５周年（平成17年）の時は美ら海水族館の協力を得て、サンゴセンター前で移動水族館を開館しました。子ども達には大好評！

平成17年度に開催した「サンゴ礁楽会」の様子

開所６周年（平成18年）記念の際には八重山ダイビング協会と協力して記念講演会をダイビングフェスタ時に開催しました。この時は講師としてさかなクンを招待して、市民体育館を借りて開催しました。

平成18年度に開催した「子どもサンゴ礁楽会」での子ども達を前にしたーコマ

平成20年には海人のお祭りであるハーリーに職員有志で参加しました！

この写真は平成５年（1993年）頃、石垣地方合同庁舎前で撮影されたと思われるものです。現サンゴセンターに引っ越す前は、石垣地方合同庁舎の中に環境庁の事務所が設置されていました。
当時の事務所名は西表国立公園管理事務所。現在の事務所名は石垣自然保護官事務所です。国立公園の管理だけではなく、サンゴ礁生態系の自然再生事業、イシガキニイニイ等の希少な野生生物の保護、オオヒキガエル等の外来生物対策まで幅広い業務を求められるようになりました。

石垣自然保護官事務所職員紹介

田村努自然保護官：子供パークレンジャーのスノーケル授業での一コマ。田村自然保護官のカヌー（安全管理用）がちびっ子たちにジャックされた！？

渡瀬博美自然保護官（左）：球磨弁が素敵なおじさまです。ちなみに右は西表自然保護官事務所の永長自然保護官。なにやら楽しげな二人ですね。センター前にて。

佐藤大樹自然保護官：石西礁湖へサンゴ調査をした時に撮影された姿。北国出身ですが南国の日差しを浴びてだいぶ焦げました。船の上でも笑顔が素敵です。

勝部五葉自然保護官補佐：両生類・爬虫類の対応が得意で石垣自然保護官事務所で最も男らしいと巷で評判です。この日も外来生物のグリーンイグアナを捕まえていました。

比屋根理恵自然保護官補佐：写真ではまじめな顔でサンゴの再生事業に使う道具を説明していますが、いつも明るい性格でサンゴの石垣自然保護官事務所で一番親しみやすいキャラクターの持ち主です。子ども達の人気者。

山下三智子事務補佐員：石垣自然保護官事務所では縁の下の力持ち的な存在。自然保護官・自然保護官補佐がスムーズに仕事が出来るのは山下さんの存在が大きいです。十周年式典のプレゼンテーションの間も屋外会場ゆえに風に煽られるスクリーンを裏で支えてくれていました。

十周年事業を終えて～職員からのメッセージ

【田村　努自然保護官】

気付くとまる３年、八重山暮らし。釧路ナンバーのわが車もすっかりこの島に馴染んだ。自分が石垣自然保護官事務所に在席している平成20～22年は、幸いにも顕著な白化現象、オニヒトデの大発生、大型台風の到来はなく、徐々にだがサンゴが回復している実感を受けた。特に、西表島崎山湾・網取湾のサンゴ礁の美しさとその命の力強さは忘れられない。しかし、業務中、最近よく思う、自分らは役立っているのかと。眼前にあるダイナミックな自然とそれらに抱かれ感受性の高い人々を相手しているため、もっと大切で本質的なことに取り組みたいものだ。

【渡瀬　博美自然保護官】

環境省へ出向してもうすぐ１年、あっという間だった。忙しかった十周年記念式典準備、楽しかった「十周年記念海の観察会」、環境省との付き合いは山でしかなく海での仕事は初めて、新鮮みあふれる職場だ。青い空、白い雲、青い海、このような自然あふれる石垣に来られてよかったと思う。少し不便ではあるが、もう少しこの石垣での生活を満喫し、いい思い出をいっぱい作り懐かしみたいと思う。

【佐藤　大樹自然保護官】

平成22年は、サンゴセンターが開所され十年という節目である。十年という時間は八重山のサンゴ礁に流れた時間に比べれば、比較にならないほど短い時間である。しかしこの十年の間にもサンゴの大規模白化やオニヒトデの大発生等により、八重山周辺のサンゴ礁の様子がダイナミックに移り変わっていることが、継続的なモニタリングによって分かっている。また先輩方から頂いた原稿を拝見すると勤務する職員の仕事もその時により変わってきたことがわかった。

サンゴ礁のモニタリングは継続自体が重要でセンターの「芯」となる重要な仕事だが、今後も地域や世界のニーズ、サンゴ礁生態系の移り変わりに対応できるしなやかなサンゴセンターでありたいものである。

【勝部　五葉自然保護官補佐】

ここ石垣に来てもうすぐ３年が過ぎようとしています。私が働いているここは国際サンゴ礁研究・モニタリングセンターという名前ですが、サンゴだけに留まらず陸から海から携わるこのお仕事は、刺激的で毎日が感動です。私は主に陸上の生き物、特に両生類や爬虫類を相手に奮闘しています。キモチワルイといわれがちな彼らも、じっくり向き合えばカワイくて魅力的！！すぐそばにある自然の美しさに少しでも多くの人に気付いてもらい、そしてこの贅沢の極みが永遠に続くように少しでもお手伝いできればと思っています。

【比屋根　理恵自然保護官補佐】

石垣に来て半年足らずで関わる２回目の観察会が、十周年記念式典の前日にオープニングとして行うアイデア。お船も出して、参加者30名を引き連れての開催。周りから「絶対に事故の無いように、翌日の式典に響く」と真顔で言われ、何があっても参加者を連れ帰る気持ちで開催。参加者の反応もよく、楽しんでくれたようで本当にホッとしました。展示会では、サンゴの話し、また石垣の自然について話すとき、島の人はよく知っているし、またうまく利用している。その良さを繋げていくことの大切さを実感する時間となりました。

【山下　三智子事務補佐員】

ここに来て、いったい何回のイベントを迎えたことになるでしょうか。始めに５周年。年に数回ある自然観察会とあっと言う間に月日過ぎ、気がつけば今回の十周年。すべてのイベントで共通することは、当日ギリギリまでドタバタして、式典が始まるとどうにかなるから不思議です。今回も、前日の観察会から、当日の式典、それに続く展示会と12月は慌ただしく、どうにか終ったというのが正直な感想です。十周年記念事業は土俵際で踏ん張って逆転勝利！がんばり抜いた！そんな感じがします。関わった職員のみなさん本当にお疲れ様でした。

編集後記

「サンゴセンター開所十周年」、振り返ると、記念事業の内容・企画から物品や会場の手配、各関係者の皆様への協力依頼までよく乗りきったと思います。記念式典を開催してまだ三ヶ月しか経っていませんが、遙か昔のように感じます。

十周年記念のスタートは開所式の綴りを紐解くことから始めました。開所当時のサンゴセンター職員であった川越さん・高橋さんが残された記録を読み、開所時の環境省（当時は環境庁）の組織としてのサンゴセンターへの想い、個々の職員の情熱に触れることができました。

さて、サンゴセンターに勤務している今の職員にも、次の職員にバトンを渡す日が来ます。その日には、今までの先輩職員が残された想いに、自分の想いを少しプラスして渡せることができればと改めて思った十周年記念事業でした。

Lagoonで寄稿をお願いし快く応じて下さった皆様を含め、サンゴセンター開所十周年記念事業に協力してくださった全ての皆様に御礼を申し上げます。　（佐藤大樹）

９月半ば頃に「サンゴセンター開所十周年記念事業を行う。」と決まってからは記念式典、展示会、観察会と事務所一丸となって突っ走って来ました。それからホッとする間もなくLagoonの開所十周年記念号発行とギリギリでこなしてきた記念事業でした。本を作成することも初めてで、ましてやほとんどの自然保護官、関係者のお名前もお顔を存じ上げない私が原稿のとりまとめをすることとなり不安のスタートでした。

しかし、いざ蓋を開けてみると、皆さんからのサンゴセンターにかける熱い思いやこれからの期待をつづられた原稿を頂くとこれまでの不安が消え、むしろ皆さんに支えられて出来上がった記念号であると気づかされました。特にこれまで石垣自然保護官事務所に勤務されてきた諸先輩方の原稿を読むにつれ、ここ石垣で仕事が出来る楽しみとありがたさを実感せずにはいられません。

今回は、原稿依頼から締め切り日まで短い日程にも関わらず原稿を頂いた皆様には感謝の念で一杯です。　（比屋根理恵）

サンゴの海の巡視も大事な仕事。豊かな海が守られますように。

国際サンゴ礁研究･モニタリングセンターのご利用について

環境省国際サンゴ礁研究・モニタリングセンターは、石垣島の市街地にあり、サンゴ礁保全や環境保全についての研究・活動をされる方はどなたでもご利用いただけます。

センターの実験室は、簡単な実験を行う場所として、また野外調査の拠点として利用することができます。会議や講演会を行うことのできるレクチャー室、サンゴ礁の生物に関する文献や石西礁湖を中心としたモニタリング調査の報告書等が備えられた資料室などの設備もあります。詳しくは、右記ホームページをご参照ください。

ご利用に際しては事前のお申し込みが必要となりますので、下記までお電話でご連絡ください。また、施設見学等も随時行っております。

国際サンゴ礁研究モニタリングセンター
〒907-0011　沖縄県石垣市八島町２-27
TEL：0980-82-4768　FAX：0980-82-0279
電子メール：okironc@coremoc.go.jp
ホームページ：http://www.coremoc.go.jp/

※この冊子はFSC認証をうけた紙を使用しています